査読付き研究ノート

アルセニオス派のシスマ終結の背景について

ヨーロッパ文明史研究所
研究員　橋　川　裕　之

要　旨

1310年９月14日、正教会暦の聖十字架の高揚の祝日に、アルセニオス派のシスマは終結した。1265年に解任されたコンスタンティノープル総主教アルセニオスを支持する修道士や聖職者が中心となったこのシスマは、末期ビザンティン帝国に生じたもっとも深刻な宗教問題の１つと一般にみなされている。というのも、アルセニオス派の運動は、アルセニオスの解任を誘導した皇帝ミハイル８世パレオロゴスの強権的な帝国支配に反発する人々からも積極的に支持されたことで、帝国の一体性に対する内的脅威となったからである。問題の解決はミハイルの治世には果たされず、後継者のアンドロニコス２世に委ねられた。

本稿の目的は、このシスマの終結の政治的背景を明らかにすることである。１つの重要な手がかりとして注目されるのは、シスマの終結前に起きた、アタナシオスからニフォンへの総主教の交代である。この問題は史料状況の悪さからこれまでほとんど論じられていないが、シスマが帝国に与えた影響や当時の教会の具体的状況を把握するためには、解明が不可欠である。この問題についての主要史料であるアタナシオスの書簡とその他の関係する記述史料の綿密な読解は、以下のような諸結論を導くであろう。すなわち、アタナシオスの２度目の在位末期、彼の意向に反してシスマ勢力との和解が模索されていたこと、当時キジコス府主教であったニフォンがシスマの解決に寄与しうる有力な教会人として皇帝アンドロニコスから注目されたこと、皇帝がとある修道士から告発を受けたニフォンを教会裁判の延期という方法によって擁護するのみならず、同じ方法によってアタナシオスの失脚を誘導したこと、そして、アタナシオスや一部の同時代人が感じたような帝国の法的機能不全が少なからず皇帝権威に由来するものであったことである。

キーワード

アルセニオス派のシスマ、ビザンティン教会、総主教アタナシオス１世、総主教ニフォン１世
皇帝アンドロニコス２世パレオロゴス、常設教会会議、教会裁判、ビザンティン法制

英文要旨

On September 14 in the year 1310, on the feast day of the Holy Cross, the so-called Arsenite Schism ended almost half a century after its occurrence. This ecclesiastical schism, the nucleus of which was a group of monks and lower clergy who supported the legitimacy of Patriarch Arsenios, deposed in 1265, is usually considered as one of the most crucial religious disputes which took place in the late Byzantine period. For the movement of the Arsenites soon became a grave internal threat to the political unity of the empire since it found many zealous supporters among those discontented with the authoritarian governance of the emperor Michael VIII Palaiologos, who induced the deposition of Arsenios. The schism was not brought to an end during the reign of Michael, and its final solution was thus entrusted to his heir Andronikos II Palaiologos.

The purpose of this paper is to illustrate the political background of the end of this schism. One important clue to be investigated is the succession of the patriarchal throne of Constantinople from Athanasios I to Niphon I, which occurred shortly before the end of the schism. Although this has hardly been discussed

in previous scholarship because of a paucity of written sources, its historical inquiry is necessary for a further understanding of the various effects the schism had on the society and the specific circumstance of the church. A careful reading of the primary source, that is, the correspondence of Athanasios, and other relevant contemporary documents will lead us to the following conclusions: first, probably in the last stage of the second patriarchate of Athanasios, accommodation with the schismatics was being sought against his staunch opposition, second, Niphon, metropolitan of Kyzikos, was considered by the emperor Andronikos as a capable ecclesiastic who could contribute to the resolution of the schism, third, the emperor not only defended Niphon from an accusation of sacrilege by suspending the ecclesiastical trial, but also induced the fall of Athanasios by resorting to a similar measure, and last, malfunction of the empire's legal system as was perceived by Athanasios and some of his contemporaries originated more or less from the imperial authority itself.

Ⅰ．シスマの終結

彼は皇帝に、ただある１つのよいことを助言したように思われる。それは独自の方法で指摘されたものではないけれども、彼はその問題に対する皇帝の燃えるような衝動を理解し、解決へ向けて協力したように思われる。すなわち彼は、かつて空疎な意見を重んじて神の普遍的教会から離脱したアルセニオス派を受け入れるよう、また、彼らとその後継者たちが魂の死に脅えることも、他の者を惑わすことも、同じ破滅に落ち込むこともないよう、皇帝の諸布告とともに協力したのである。かくして皇帝は総主教の助言に同意したのであるが、それは彼が久しく望んでいたことであった。あたかも巨人たちが石や木苺の茂みから突如現れたかのように、多くの場所から多くの人々が集結した。彼らはぼろぼろの服をまとい、心の内奥をおびただしい空疎な意見でほとんど埋め尽くしていた。実際、ある者は、理由なく分派となったわけではないことを大勢の人々に切に示さんと欲して、暴力的に振る舞い、穏やかでないやり方で聴聞を退け、審問を拒んだ。彼らが要求したのは、第１に、総主教であったアルセニオスの遺体を聖アンドレアスの修道院から、神の知のもっとも偉大なる聖堂へ瞭然かつ粛然と移転すること、第２に、司祭の地位にある人々が清めのための贖罪行と40日間の聖務停止を厳然と科されること、第３に、すべての人々が規定のとおり断食と跪拝を命じられることであったが、彼らはこれ以外にも同様の狂気の要求を持っていた。皇帝は平和と和合の善を求める熱意から、それらすべてを容認した。けれどもまだ、シスマから集合した人々はふさわしい尊厳によっても、むろん府主教座の主教らによっても、修道院の上長らによっても、帝国の特権者らによっても、歳入の調達によっても称えられていなかった。反発したすべての人々はこうした和合から分離し、再び以前の独特の作法にならい、シスマ勢力として暮らした。一方、総主教は彼ら、集結したアルセニオス派に促され、司祭服を身にまとって説教壇に登り、アルセニオスの遺体の前に立ち、あたかも本当のアルセニオスから発されるかのように、すべての人々に赦免を宣告した[1)]。

これは14世紀ビザンティンの高名な歴史家ニキフォロス・グリゴラスによる、1310年９月14日のアルセニオス派のシスマの終結についての記述である。この引用文で固有名詞が言及されていない皇帝と総主教はそれぞれアンドロニコス２世パレオロゴス（統治1282-1328年）とニフォン１世（在位1310-14年）である。アルセニオス派のシスマは、アンドロニコスの父、ミハイル８世パレオロゴス（在位1259-82年）がラテン人の手からコンスタンティノープルを奪取した後、パレオロゴス家による帝国支配を確立する過程で生じた、ビザンティン教会のシスマである。ミハイルはもともと、第４回十字軍の後に小アジアのニケーアに拠点を置いた、いわゆるニケーア帝国の軍事貴族の１人であったが、1259年、有力貴族らとクーデタを起こして政治権力を掌握し、当時10歳に満たなかった皇帝ヨアニス４世ラスカリス（在位1258-61年）の共同皇帝となった。ミハイルはコ

ンスタンティノープルの回復に成功した1261年の冬、ヨアニスを盲目にしたうえで、マルマラ海南岸の要塞に追放した。ミハイルが自らの王朝を確立すべく起こしたこの事件は、若くして没した皇帝テオドロス２世ラスカリスからヨアニスの摂政に任じられていた総主教アルセニオス・アウトリアノス（在位1254-60年、1261-65年）を激怒させ、彼はミハイルに破門を宣告した。ヨアニスへの過酷な処遇に端を発した皇帝と総主教の反目はしばらく持続したが、1265年、ミハイルを支持する主教団は教会会議において、アルセニオスが皇帝に対する陰謀を企てたと告発してその解任を決議し、彼をマルマラ海に浮かぶプリコニソス島（今日のマルマラ島）の修道院に追放した。アルセニオスの解任を受けて、彼を支持する修道士や聖職者らは中央教会から公然と分離した[2)]。

こうして生じたアルセニオス派のシスマはたんなる教会内の争議に留まらなかったことがよく指摘される。というのは、アルセニオス派の主体はアルセニオスの大義を支持する修道士や下級聖職者であったが、彼らの運動は皇族の一部のみならず、廃位されたヨアニスに好意的な小アジアの住民層からも熱烈な支持を受けたからである。シスマは教会問題であると同時に、高度に政治的な王朝問題でもあったのである[3)]。

問題をより困難にしたのは、アルセニオスがミハイルへの破門を解くことなく追放先で没したこと、そしてミハイルの後継者アンドロニコスが1272年に共同皇帝となるに際して、アルセニオスではない総主教、ヨシフ（在位1267-75、1282-83年）から塗油されたことである。ミハイルは、ガリシオン山の首長であり自らの霊父でもあったヨシフを総主教に選び、彼に破門を解除させたが、アルセニオス派はヨシフによる破門の解除はもとより、ヨシフの総主教としての正統性すら承認しなかった。これが意味するのは、彼らにとって、アルセニオスによるミハイルへの破門は依然有効であるとともに、ヨシフから塗油されたアンドロニコスの正統性も疑わしいということであった。アンドロニコスがシスマの解決を「久しく望んでいた」というグリゴラスの記述は、アンドロニコスがミハイルの死後、弾圧という強硬な手段に訴えた父帝とは異なり、より穏健な方法による問題の解決を望んでいたこと、そして、その希望にもかかわらず、1310年にいたるまで解決が実現しなかったことを示している。

実際、アンドロニコスがシスマの解決に腐心し、アルセニオス派と断続的に折衝していたことは、いくつかの同時代史料から確認できる。たとえば、ミハイルの治世とアンドロニコスの治世半ばまでの歴史を書いたゲオルギオス・パヒメリスは、大教会（コンスタンティノープル総主教座の聖ソフィア聖堂）に勤務する高位聖職者というその特別な立場をいかし、アルセニオス派の構成や皇帝による和解の試みなどを詳細に記しているが、アンドロニコスが総主教ヨアニス12世コスマス（在位1294-1303年）の在位末期にアルセニオス派と水面下で接触し、ヨアニスの後任総主教の人事について具体的な協議を行っていたことは、彼の歴史書によってしか知られていない[4)]。

一方、アルセニオス派が1289年頃に皇帝に送付した要望書も現存しており、この文書から彼らが第１に求めていたのは、アルセニオス派の総主教の選出であったことがわかる[5)]。明らかにこれは、総主教ヨシフから塗油された皇帝にとっては承服困難な要望であった。実際、皇帝はミハイルの死の直後、教会合同推進者のヨアニス11世ベッコス（在位1275-82年）を退位させ、1275年、合同の成立にともない退位していたヨシフを復位させているし、1283年にヨシフが病没すると、アルセニオス派ではない俗人学者、キプロスのゲオルギオスを選出している（総主教グリゴリオス２世、在位1283-89年）。アルセニオス派が上述の要望書を皇帝に送ったのはグリゴリオス２世の退位後と思われるが、そこでも皇帝はアルセニオス派の希望に背いて、反アルセニオス派の修道士アタナシオス（在位1289-93年、1303-09年）を選んでいるし、アタナシオスの後任には同じく反アルセ

ニオス派の修道士コスマスを就けている。アルセニオス派ほどの明確な集団意識は持たなかったと思われるが、ミハイルの時代には、教会合同に反対して総主教座を去ったヨシフを支持する、ヨシフ派なるシスマ集団が成立しており、アンドロニコスはヨシフ派に教会の支配を委ねる一方で、アルセニオス派のシスマの解決を図ろうとしていたのである。皇帝のこうした方針は逆に、アルセニオス派にとっては承服困難なものであった。なぜなら、彼らはヨシフを被破門者および姦通者とみなし、教会における記念の抹消を主張していたからである[6)]。

このように皇帝アンドロニコスとアルセニオス派の間の根深い対立を長らくともなっていたシスマは、いかに終結へと向かったのであろうか。この問いへの部分的な解答は、歴史家グリゴラス、および、シスマの終結に関連して作成された皇帝と総主教の諸文書が与える。グリゴラスが特筆するのは、1310年に総主教に就任したニフォンの理解と協力である。グリゴラスによれば、ニフォンは「その問題に対する皇帝の燃えるような衝動を理解し、解決へ向けて協力し（たように思われ）」、皇帝がアルセニオス派の要求をことごとく承認した後、アルセニオスの遺体が運び込まれた聖ソフィア聖堂の説教壇に登り、その遺体を前にして「すべての人々に赦免を宣告した」。グリゴラスの記述は一方で、ニフォン以前の総主教がニフォンのようには皇帝の衝動を理解し、解決に協力しなかったことを、他方で、グリゴラスが直接にはニフォンの理解と協力を知らなかったことを示唆する。

このうち後者についてみれば、グリゴラスは1310年の時点ではコンスタンティノープルに暮らしておらず、したがって、９月14日に聖ソフィアで行われた儀式の直接の目撃証人であった可能性は低い。グリゴラスは1290年代前半に小アジアのポントイラクリアで生まれ、幼少時に両親を失って孤児となったため、同市の府主教であった叔父のヨアニスの手で育てられ、1310年代半ば頃に上京してコーラ修道院に住まい、総主教に就任する直前のヨアニス・グリキス（在位1315-19年）に師事した[7)]。『ローマ史』における彼の記述がより密になるのは1320年代以降であり、1320年代までの出来事に関する比較的簡略な記述は、１つにはゲオルギオス・アクロポリティスやパヒメリスといった先行する歴史家の著作がすでに存在したためであり、いま１つには、利用可能な直接および間接の情報源が限られていたためであろう。とはいえ、当時の彼の叔父は現役の府主教であったことから、教会の問題について彼は一般の人々よりも格段に多くの情報を得ることができたであろう。加えて彼はシスマの終結を記すに際して、彼が「皇帝の諸布告」と呼ぶものを含む、皇帝と総主教が発行した一連の公文書を参照した痕跡がある。

一方、半世紀以上前にフランスの碩学ヴィタリアン・ローランが校訂したこれらの文書のテクストからは、最終的にアルセニオス派がその第１の要求を撤回していたことが明らかになる[8)]。９月14日の儀式に先立って、皇帝はアルセニオス派に対し、彼らの求めた６項目すべてへの回答を記した勅令（プロスタグマ）を発しているが（正確な日付は不明）、そこにはもはやアルセニオス派の総主教の選出は含まれていないのである。代わりに彼らが第1に求めたと思われるのは、総主教ヨシフの記念の抹消である[9)]。これはヨシフの正統性および証聖者としての地位に固執する人々には受け入れがたかったであろうが、そうでない人々にはシスマを終わらせるためのやむなき妥協として、十分に受け入れ可能であったろう。このようにシスマ勢力が妥協に応じ、新たに就任した総主教も皇帝に積極的に協力する姿勢を示したことで、皇帝はより穏当な形でシスマを終結させることが可能になったのである。

本稿は、ニフォン以前の総主教はニフォンのようには振る舞わなかったという、グリゴラスの記述が示唆するもう１つの可能性に関係する。総主教をアタナシオスとヨアニス・コスマスと解する

なら、それは可能性というよりはむしろ歴史的な事実である。両者がアルセニオス派と敵対的な関係にあったことは、パヒメリスの史書のほか、皇帝がアルセニオス派に発した上述の勅令が明らかにする。それによれば、アルセニオス派の６つ目の要望は、「少し前に総主教であった人々、すなわち、アタナシオス殿とヨアニス殿が将来２度と総主教位に就かないこと」[10] であった。この文言は、アタナシオスとヨアニスが断固とした反アルセニオス派である一方、ニフォンがそうではなかったこと、そして、アタナシオスからニフォンへの総主教の交代が、アルセニオス派が譲歩するうえで重要な要因になったことを示唆する。

我々が以下で明らかにしようと試みるのは、アルセニオス派のシスマ終結の１つの重要な背景であったと思われる、このアタナシオスからニフォンへの交代が、いかにして生じ、そこにシスマがいかに絡んでいたのかという問題である。一見単純なこの問題は史料の乏しさからアプローチが難しく、アルセニオス派のシスマに関するこれまでの研究でもほとんど扱われていない[11]。アタナシオスの総主教としての動向を敵対者の視点から詳細に記録しているパヒメリスは、1307年の夏で唐突に記述を打ち切っているため、1309年９月のアタナシオスの退位前後の状況について彼に頼ることはできない。グリゴラスは1204年の事件から説き起こしているため、1307年夏以降のことも記述しているが、彼の関心は帝国の政治および軍事状況にあり、教会の問題をめぐる記述の詳しさはパヒメリスのそれに遠く及ばない。アタナシオスの死後に書かれた２篇の聖人伝は全般的な記述の詳しさにかかわらず、それほど有益な情報を含んでいない。この問題について、もっとも重要な手がかりを我々に与えるのはアタナシオス自身の書簡であろう。彼のいくつかの書簡は、総主教の意向に反する形で、シスマ勢力との和解がひそかに模索されていたこと、そして、当時キジコス府主教であったニフォンがアタナシオスにとっても皇帝にとっても無視できない人物になっていたことをほのめかす。こうしたアタナシオスの背後での動きはアタナシオスの失脚を誘導する動きでもあったことが、考察の結果、明らかになるであろう。

Ⅱ．アタナシオスとニフォンの不和

アタナシオスとニフォンはともに総主教に就任する以前にギリシャ北東の聖山、アトスでの生活歴があったという点で、パレオロゴス朝期に生じた総主教人事の変化を象徴する人物である。アタナシオスは1230年頃にトラキアのアドリアノープルで生まれたとされ、聖人伝によれば、若くして修道士となって聖地や帝国内の諸聖山を遍歴し（アトス山には２度滞在している）、アンドロニコスの治世にコンスタンティノープル市内の１修道院に定着した[12]。一方、ニフォンは生年は不明であるが、出身地はテサロニキ近郊の都市ヴェリアであったとされ、アトスの大ラヴラ修道院の院長を務め、あるときマルマラ海南岸の都市キジコス（今日のエルデッキ）の府主教に選出された。ラヴラの修道院長になるまでの彼の経歴も不明であるが、当時のアトスで最大規模の共住修道院の院長に任じられていることから、同院での生活歴は相当に長かったものと思われる[13]。

両者に対するパヒメリスとグリゴラスの評価は好対照をなしている。アタナシオスがそれを自覚していたかどうかは定かではないが、パヒメリスはアタナシオスの主要な批判者の１人であり、その存在を、彼自身を含む高位聖職者にとっての災厄とみなしていた。彼の史書にはアタナシオスについての記述が多く含まれているが、それらはすべて批判者の視点から書かれたものであり、彼への好意的な言及は皆無である[14]。ニフォンに対しては、彼が1303年の夏にトルコ人勢力の攻撃から赴任地であるキジコス市を防衛したことに触れ、「この人は精力的で、実際的な物事に関しても宗教的な物事に関しても知恵を備えていた」[15] と、優れて好意的な評価を与えている。一方、グリゴラスの両者に対する評価は一部重複する点はある

ものの、おおむねパヒメリスの評価を逆にしたものである。彼はアタナシオスの教養や政治感覚の欠如を認めつつ、教会勢力に対するその改革の試みを称賛し、ニフォンに対しては、その賢さをもっぱら私利私欲のために発揮した人物と評し、彼をリビアの砂漠に生息する毒蛇になぞらえている。本稿の冒頭に引用した記述は、グリゴラスのニフォンに対する毒舌的評言に続くものである。ニフォンが皇帝に「ただある１つのよいことを助言した」という文言は、彼がシスマの終結に協力したことを除き、皇帝に何１つ有益な助言をなさなかったというグリゴラスの私見を反映している。パヒメリスのアタナシオスに対する辛辣な評価は、彼がアタナシオスと敵対して首都を2度追われたアレクサンドリア総主教アタナシオス２世の友人であったことを[16]、グリゴラスのニフォンに対する同様の評価は、ニフォンが総主教解任後にアンドロニコス２世の孫、アンドロニコス３世と交友を結び、1320年代の内戦に勝利した後者に対し前者、アンドロニコス２世を退位させるよう助言したことを差し引いて考える必要がある[17]。グリゴラスのパトロンであり、1300年代半ば以降、アンドロニコス２世の右腕的な存在であった高官テオドロス・メトヒティスは、アンドロニコス３世の権力掌握によって失脚の憂き目に会っていた[18]。

アタナシオスとニフォンの関係について同時代史料ははっきりしたことを語らない。両者はアトス山内で面識があったかもしれないし、そうでなかったかもしれない。筆者は別の場所で、ニフォンをラヴラの院長からキジコス府主教へ昇格させたのはアタナシオスであると論じたが、厳密にいえば、これは決定的な証拠の欠如により仮説に留まる[19]。けれども注目すべきは、少なくとも1303年夏の時点で、ニフォンがアタナシオスの理想を体現する主教であったことである。アタナシオスは、とりわけ危機の時代にあっては、羊飼いたる主教は羊の群たるその信者を自らの身命を賭して守るべきであると考えており、それ以前の総主教には見られないこの独自の姿勢は、彼と、教区を離れ首都に暮らすことを好む一部主教らの間に深刻な軋轢をもたらした。実際、２度目の在位期においてアタナシオスは首都に滞在する主教を教区へ送り返すべく、種々の手段を講じている[20]。アタナシオスが１書簡で引用しているヨハネによる福音書の表現にならえば、キジコスの信者を異教徒トルコ人の攻撃から守ったニフォンは、狼から群を守るよき羊飼いであった[21]。

ところが興味深いことに、アタナシオスの書簡集の中には、彼がニフォンに宗教的嫌疑をかけていたことを示す複数の証拠が存在する。アリス・メアリー・タルボットが1975年に刊行した批判校訂版の書簡89番、95番、105番がそれである[22]。89番と95番は皇帝（Πρός τὸν αὐτοκράτορ）を、105番は主教の中のある人々（Πρός τινας τῶν ἀρχιερέων）を宛て先とする書簡である。いずれの書簡も、アタナシオスの背後で何か重大な事態が進行していたことを感じさせる、切迫した文面が特徴的である。けれども、これらの書簡の書き手であるアタナシオスはニフォンの名にもキジコスの地名にも言及しない。その２つの固有名詞に言及するのは、タルボットの版が依拠するヴァティカン写本（Codex Vaticanus Graecus 2219）の当該書簡の表題である。たとえば、89番の表題はこう記されている。「彼の耳に入った告発ゆえの、キジコスの人であるニフォン殿についての皇帝宛ての書簡」[23]。名称不明の写字生はこの表題によって、アタナシオスの同書簡の内容が、キジコス府主教ニフォンに対する何らかの告発に関係することを明らかにしている。95番と105番の表題はそれぞれ以下のとおりである。「キジコスの人のことで修道士によって報告され、無視されないのであれば未検討の問題についての皇帝宛ての書簡」[24]、「総主教がキジコスの人のために苦悩していることを皇帝に通知させるための、主教の中のある人々宛ての書簡」[25]。これら２書簡の表題では渦中の人物は「キジコスの人τὸν Κυζίκου」としか言及されないが、それがニフォンを指すこと

は書簡の内容の関連性からみて間違いない。

これらの表題は、キジコス府主教であったニフォンがとある修道士から告発されたこと、総主教アタナシオスがこの問題へのしかるべき対処を皇帝に求めたこと、そして、苦悩したアタナシオスが皇帝に働きかけるべく、複数の主教に協力を求めたことを示唆する。仮に表題の情報が信用に値するものならば、ニフォンとアタナシオスにいったい何が起こっていたのであろうか。

この問題に立ち入る前に確認しなければならないのは、表題の情報の信憑性である。タルボットによれば、表題の写字生は当時の標準的なギリシャ語に精通しておらず、したがって、綴りと文法の誤りが数多く確認されるが、一方で、彼は、特定書簡の表題でキジコス府主教ニフォンがテクストに関する人物であることを明かしたり、テクストで地名の言及されない皇帝宛ての書簡（１番）がテサロニキ滞在中の皇帝に宛てて書かれたものであることを示したりするなど、「アタナシオスの同時代人であって、彼のキャリアに詳しかった」可能性がある[26]。マノリス・パテダキスは表題とアタナシオス伝の語彙の共通性から、アタナシオス伝の作者、ストゥディオスのテオクティストスが表題の記入者であった可能性を示唆しているが[27]、聖人伝やそれに類する作品を書くことのできた人物が、タルボットの指摘するような綴りと文法のミスを多く犯すとは考えにくい。

告発を受けた人物の身元については、テクストの中にも関係する情報が含まれている。書簡89番の末尾でアタナシオスは、「別の方法でその任地へ戻るのは、彼［くだんの被告］にとっても我々にとっても不都合なことでしょう」[28] と述べている。この引用で「任地」と訳したギリシャ語λαχούσῃは、割り当てるという意味の動詞λαγχάνωのアオリスト分詞であり、直訳すれば「割り当てられたもの」となる。アタナシオスはこの語を主教の任地ないし教区を指すときに頻用していることから、名称不明の被告は主教であり、アタナシオスがこの書簡を書いた時点では教区ではなく、首都に滞在していたと判断できる[29]。また、書簡95番には、「救いを望む人は誰も、聖像に対して狂乱する人々と交わりを持ったり友人になったりすることに耐えないでしょう」[30] とあり、修道士による告発は、主教と思しき人物の「聖像に対して狂乱する」行為、つまりは聖像の冒瀆行為に対してなされていたことがわかる。

タルボットは、この「聖像に対して狂乱する」と類似する表現が、総主教ニフォンに対する告発テクストの中に現れることを指摘している。これは高官ニキフォロス・フムノスによって作成され、教会会議においてニコメディア府主教とミティリニ府主教によって朗読され、1314年のニフォンの解任を決定づけたと思しきテクストである[31]。作者であるフムノスはニフォンの違反的行為と彼がみなしたものを列挙し、違反と認定される根拠を含め、それぞれに詳細な説明を与えている。フムノスはニフォンが聖像から金銀を流用したと記すが、その説明の中に「キリストとその母の像と同様の７枚の像に狂乱する」[32] という文言がある。このフムノスの説明から明らかになるのは、「聖像に対して狂乱する」行為の内実である。フムノスによれば、ニフォンは30タラントの金銀を特定の聖像から不正に入手していた。実際にそれをなしていたか否かはさておき、書簡95番の被告もおそらくは同様の行為を修道士から告発されたのであろう。２つのテクストにおける表現の類似は、フムノスとアタナシオスがニフォンの同じ行為に言及している可能性を示唆する。

被告についてのもう１つの手がかりは、95番の「それにより悲しみがあなたの魂を満たすとしても」[33] という文言である。アタナシオスは被告に対する裁判の迅速な実施を皇帝に求めているが、くだんの文言は、裁判の実施が皇帝にとっては何らかの痛手となることを示唆する。皇帝が実際に裁判の実施を躊躇していたとすれば、それは被告が皇帝にとって重要な人物であったからと考えるのがもっとも妥当である。

以上の情報をまとめると、アタナシオスの言及

する匿名の被告は、第１に、主教であり、第２に、総主教ニフォンが後年そうされたように、聖像から利益を獲得したと告発され、第３に、皇帝アンドロニコスにとって重要な人物であった。明らかに、ニフォンはこの３項目すべてを満たす人物である。皇帝にとってのニフォンの重要性は、彼が総主教としてシスマの解決に協力したという事実のみならず、グリゴラスの以下の記述によっても確証されるであろう。「主教らは皇帝の希望に譲歩して、キジコスから総主教の座へと彼［ニフォン］を押し上げた」[34]。グリゴラスによれば、皇帝はニフォンの総主教就任を強く希望していた、つまり、ニフォンは総主教に就任する以前から、皇帝にとって重要な存在となっていたのである。こうしてテクストのみに注目しても、ニフォンの名が浮かび上がることから、被告はニフォンその人であったとみて間違いないであろう。

Ⅲ．ニフォンの疑惑とその周辺

続いて、この問題において、アタナシオスとニフォンが具体的にどのような状況に直面していたのかを考察してみよう。

まず、問題の生じた時期ないし関連３書簡の書かれた時期について、タルボットはアタナシオスの２度目の在位末期ないしは退位の直前と考えている。彼女はそう特定する根拠を示してはいないけれども、パヒメリスの史書に言及がないことが１つの有力な根拠となりうる。すぐ後に触れるように、この問題には皇帝も関係していたことから、エリート聖職者として教会と宮廷双方の内情に通じたパヒメリスにとっては、記述の格好の素材となりえたであろう。パヒメリスがそれを書かなかったという事実は、この事件は少なくとも、彼が記述を終えた1307年夏以後に生じたことを示唆する。また、皇帝宛ての書簡が大半を占めるヴァティカン写本の第１部（１フォリオ表から89フォリオ裏まで）は、大雑把ではあるが、年代順に書簡が配置されており、このこともタルボットの推測を裏づけるであろう。３書簡の書かれた正確な年代を割り出すことは不可能であり、その順序も定かではないが、書簡文面の深刻さは89番、95番、105番の順で増しているように思われ、これは書かれた順に対応しているかもしれない。というのも、この問題は明らかにアタナシオスの望むようには決着しなかったからである。

総主教が管轄すべき案件でありながら、ニフォンへの裁判はアタナシオスの希望に反して実施されずにいた。アタナシオスは書簡89番の冒頭で、「訴訟のために拘留された人が、教会会議での裁判の実施を求める有力者たちによって我々のもとに送られてくるたび、我々は送った人々への好意から遅延や延期に屈することなく、迅速に責任を担い、ふさわしく考慮します」[35] と述べている。これは教会裁判に対するアタナシオスの態度を示す文言である。帝国の有力者らが教会会議での裁きを受けるべき人を拘束し、教会会議へ彼を送ると、総主教は会議を構成する人々とともに、被告に対し迅速かつ適切な裁きを行うという。教会裁判の実施は総主教座の主要な仕事の１つであり、ビザンティン教会においては、古代末期以来、常設教会会議（シノドス・エンデムサ）と呼ばれる会議がそれをおもに担っていた。この会議は通常、聖ソフィア聖堂内の一室で不定期に開催され、総主教および首都に滞在する主教が持ち込まれた問題の審議を行った[36]。ニフォンは主教であり、その容疑も聖像の冒瀆という宗教的なものであったため、彼が裁きを受けるべき場は、総主教の主催する教会会議であった[37]。けれども何らかの理由により、彼への裁きは延期されていた。考えられる理由の１つは、帝国の有力者が被告であるニフォンを教会会議に送らなかったことである。アタナシオスはビザンティン教会の首長として、いわゆる欠席裁判を行うこともできたはずであるが、彼がそれをした形跡がないということは、この問題における帝国の有力者には皇帝その人が含まれたことを示唆する。

アタナシオスは同書簡において正義の追求は宗

教的な責務であると説いた後、皇帝に対するその要求を明らかにする。

> それゆえ我々は、我々の耳に達した事柄をあたかも軽蔑に値するものであるかのごとく放置してはなりません。我々が忘却するための延期によっても、あるいは、ほかの思慮によっても。（中略）したがって、報告の甚大なる重みゆえの懸念と罪から我々が解放されますよう、今、私は以前に私が求めたのと同じこと、すなわち、2つのうちどちらか１つが聞き入れられることを求めます。１つは、神聖なる陛下ご自身がこの事件に注目され、原告と彼に対する被告の双方をご覧になること、いま１つは、双方を聴聞するために、それが我々および選ばれた若干の人々に委任されることです[38]。

アタナシオスが以前に同じ要請を書簡で行っていたとすれば、おそらく、その書簡は現存していない。それが口頭によるものであれ、書簡によるものであれ、確かなのは、皇帝が以前のアタナシオスの要請を聞き入れなかったため、アタナシオスは再度、同じことを皇帝に求める必要を感じた、ということである。他方で、この書簡は、アタナシオスが望む形でのニフォンへの裁判は、皇帝の意向により、以前から延期されていたことを示す。おそらくアタナシオスは、ニフォンへの裁きが教会会議で行われることに皇帝が不安ないし不満を感じていると判断し、是が非でも裁判を実現させるために、皇帝に代替案を提示したのである。アタナシオスが述べるように、代替案の１つは、皇帝自身が裁判官を務め、原告と被告双方の陳述を聞いたうえで判決を下す形式のもので、もう１つは、総主教を含む少数の臨時の裁判官が審議に当たる形式のものであり、いずれも総主教と主教ないし修道院長が審議主体となる教会裁判とは性質の異なる、特殊な裁判形式であった[39]。アタナシオスにしてみれば、これは皇帝に対する彼なりの譲歩であったが、皇帝は総主教の提示する最初の案にすら応じなかった。これが示唆するのは、皇帝はニフォンへの裁きそのものを望んでいなかったこと、そして、ニフォンは実際に何らかの宗教的違反を犯していたことである。

タルボットは書簡89番と95番への註釈の中で、ニフォンへの修道士の告発が、ニフォンの総主教就任とそれによるアルセニオス派との和解を阻止せんと欲したアタナシオスの策謀であった可能性を指摘しているが、アタナシオスの書簡の文面と皇帝の冷ややかな対応からは、告発は、アタナシオスとその弟子の修道士が仕掛けた謀略というよりはむしろ、ニフォンの実際の行為に根ざすものであったと思われる。この点について書簡95番は重要な情報を含んでいる。彼はその前半部で、皇帝および全正教徒にとっての、肉体に対する魂の優越、物的な事物に対する神的な事物の優越、国家支配に対する教会支配の優越を説き、皇帝にしかるべき方法で教会を監督するよう求めている。アタナシオスの見解では、教会はその最初の時期とは異なり、種々の困難を抱え込んでおり、皇帝は永遠なる天国の継承者として、教会を守護しなければならなかった。

アタナシオスは皇帝の宗教的責務を彼特有の表現を用いてひとしきり説いた後、次のように記す。

> したがって私は懇願いたします。修道士によって報告され、大きな危害を約束する問題を我々が未検討のまま通過させないことを。また、それが長引かないことを。というのも、もし死が彼を連れ去ったり、彼がたまたま移動したりすると、それは綿密に調査する人々の良心に疑念を投じるからです。これは熱枝派［アルセニオス派］や、「不正はその口を止める」［詩篇106(107)、42］ことがなければ、別様に口実を求める人々にとってもそうです。我々は自由かつ真に、綿密な調査を遂行したのです[40]。

１人の修道士が現役のキジコス府主教であるニフォンを告発したことを受けて、アタナシオスは独自に事件を調査し、裁判に臨む用意ができていた。告発がなされた以上、しかるべき場で原告と被告は吟味されねばならなかったが、皇帝は裁判

の延期を望み、何らかの方法で実際にそれを延期していた。タルボットが推測しているように、裁判の不自然な延期は、アタナシオスに政治的な危険を及ぼしえた。というのも、アルセニオス派やアタナシオスに敵対的な人々は、彼を攻撃するための口実を求めており、彼らは裁判の未実施を総主教による不正行為として告発しえたからである。

この書簡を書いた後、アタナシオスは皇帝による裁判の延期が、彼には知らされていない何らかの政治的な決定に関係することを察知したように思われる。ニフォンの問題について主教に宛てられた書簡105番は、次のように始まる。

> 判決において言葉を調整することは完成の特徴である。我々は完成を成就していないばかりか、不完成な人々よりも不完成であるので、調整する人々もしくは調整することを決める人々を非難しないために、我々は再度、我々の「口にくつわをはめておく」［詩篇38(39)、2］ことを望んでいる。調整する人々に十分と思われるまで。なぜなら、我々の不完成ゆえ、あるいは別の理由ゆえ、彼らが我々を不快にする調整を行うとき、我々は後に続くことができないから。他方で、ここに暮らすある人々を悲しませないために[41]。

この引用で５回使用されているοἰκονομέωという動詞は、教会の問題に関連して使用される場合は、現実的ないし妥協的な解決を優先することを意味する[42]。この引用が明らかにするのは、アタナシオスの背後で、教会のある問題に関する調整ないし妥協が図られつつあったことである。アタナシオスは調整を進める人々を非難するよりはむしろ、沈黙することを選ぶと書簡を宛てた主教に表明している。

調整するという語がアルセニオス派の問題に関係することは、同書簡の以下の文言からも示唆される。

> そしてその他の人々が、我々による典礼の執行に耐えられないなら、それがローマの人によいと思われないなら、彼によいと思われるよう、我々は家に留まり、我々自身の問題に専心すべきかもしれない。なぜなら、我々が教会に入っても、典礼を行わないのはなぜかと尋ねる人々に答えることはできないから[43]。

「ローマの人」はローマ教皇を意味するのは確実であり、アタナシオスはローマ教会との合同を支持する勢力との敵対も意識していたことがわかる。これについて注意すべきは、彼がそうした教会合同の支持者たちを「その他の人々」と呼んで、「調整する人々」や「調整することを決める人々」と区別していることである。つまり、アタナシオスのいう調整は、明らかに教会合同とは別の、当時の教会の重大な問題に関するものなのである。

いずれにしても、アタナシオスは皇帝の支持を失っており、事態はもはや彼の手の届かないところで進行していた。この書簡を特徴づけるのはアタナシオスの深い失望である。彼は宛て先の主教に対し、必要と判断すれば皇帝に彼の考えを知らせるよう、そうでなければ誰にもそれを通知しないよう依頼している。皇帝に書簡を送っても思うような回答を得られなかったため、彼は自らと親しい主教を通じて皇帝に働きかけようとしたのであろう。匿名の主教がその後どのように行動したかは不明である。

一方、皇帝の介入によって裁きを免れたと思しきニフォンは、いかなる経緯で問題に巻き込まれたのであろうか。アタナシオスの皇帝宛ての２書簡は、少なくともそれが書かれた時点では、原告である修道士も被告であるニフォンもコンスタンティノープルに滞在していたことを示す。

タルボットは言及していないが、ニフォンの疑惑に関係すると思しき興味深い記述がグリゴラスの史書にある。それを要約するならば、第１に、彼が管理能力に長け、経済的な問題に精通していたこと、第２に、女子修道院に関心を持っていたことが契機で、２つの女子修道院の管理を委託されたこと、第３に、社交的な振る舞いによって

権威者に取り入るのが巧みであったことである[44]。このうちとくに重要なのは、具体的な施設名の言及される２点目である。グリゴラスによれば、ニフォンに委託されたのは、それぞれペルゼとクラテウという呼び名の女子修道院である[45]。グリゴラスはこれら２修道院の委託の経緯について、ニフォンが女子修道院に関心を有していたためとしか伝えないが、委託の時期が彼の総主教就任よりも前であること、また、委託者が皇帝アンドロニコスであったことは疑いない。というのは、アンドロニコスは自らの知友である高位聖職者や修道士らに、首都での居住地ないし収入源として、修道院を提供していたからであるし、そうした恩恵を必要とするのは、総主教座内に暮らすことが望まれた総主教というよりむしろ、地方出身で首都に生活基盤を持たない聖職者や修道士であったからである[46]。地方都市ヴェリアの出身で姓も伝わっていないニフォンの場合、キジコス府主教を務めていた時期に、上述の女子修道院を委託されたと考えるのがもっとも妥当である。

この推測が正しければ、ニフォンは総主教就任前のある時期から、何らかの恩恵授与に値する人物として皇帝から認知されていたことになる。ここで皇帝がアタナシオスの度重なる要請にもかかわらず、ニフォンへの裁きを阻止していたという事実を想起すれば、ニフォンが皇帝からの気前のよい恩恵に授かったのは、アタナシオスの1309年の退位以前である可能性が高い。一方、ニフォンが皇帝から修道院を委託されていたという事実は、彼への告発とも密接に関連しているように思われる。というのも、アタナシオスが伝えるとおり、原告が修道士であったとすれば、それは違反と目されたニフォンの行為が、修道院ないしそれに類する場で生じたことを示唆するからである。グリゴラスによれば、ニフォンは２つの女子修道院から得られる収入を占有し、建築やその他のために用いており[47]、彼への告発文の作者フムノスによれば、彼は貴重な聖像さえも利益獲得のために用いていた。こうした証言を、アタナシオスの切迫した証言とあわせて考慮すると、ニフォンは皇帝から委託されたペルゼとクラタイウのいずれか（ないしは双方）の修道院で、宗教的違反に該当する行為を実際に犯していたように思われる。

皇帝がニフォンを特別な方法で擁護したのは、おそらく皇帝が、「この人は精力的で、実際的な物事に関しても宗教的な物事に関しても知恵を備えていた」という、パヒメリスと同様の感想を彼に抱いたためであろう。実際、ニフォンは小アジア西部の帝国領が破局的な状況を迎える中で、任地キジコスに留まり、同市の防衛に大きく寄与していた。その管理者としての稀有な才能ゆえに、彼は皇帝から注目され、将来の総主教候補として特別な扱いを受けるにいたったのであろう。このような状況は、強硬な反アルセニオス派であるアタナシオスのさらなる孤立と失脚を不可避とするものであった。

Ⅳ．アタナシオスの失脚

1309年のアタナシオスの失脚について、タルボットは次のように記している。「けれども、アタナシオスの最終的罷免へのアンドロニコスの同意の背後にある真の理由は、アルセニオス派のシスマを終結させようとする皇帝の欲求であった。アンドロニコスは個人的な忠誠ゆえに、多くの非難に抗して長くアタナシオスを支持したが、結局、教会に平和をもたらす唯一の方策は、アルセニオス派との妥協を頑なに拒む、不屈の総主教を排除することと判断したのである」[48]。我々もニフォンの疑惑をめぐるアタナシオスの書簡を注意深く検討した結果、タルボットと同じ結論に達したといえる。アタナシオスからニフォンへの総主教交代の経緯を理解することを目標に設定した以上、我々はアタナシオスの失脚の経緯についても立ち入った考察を行わなければならないが、残念ながら、紙幅はもはやそれを許さない。それゆえ今後、別の場で考察されるべき問題を簡単に示して、いったん立ち止まることにしよう。

アタナシオスは退位したのか、それとも罷免されたのか。上の引用でタルボットは「罷免deposition」という語を用いているが、彼女は別の場所では辞任や退位を意味するabdicationやresignationをもっぱら用い、アタナシオスが解任されたとは断言しない。つまり、タルボットは1309年にアタナシオスが自発的に総主教位を去ったとみなすわけであるが、これは、退位を決意したアタナシオスが教会会議に宛てた辞任状が現存しているためであろう。けれども、アタナシオスは別の書簡（115番）で、退位に際して彼の予期せぬ事態が生じたことを示唆している。

> これは神をその証人とする、最初と２度目の罷免の陰謀と話題です。たとえ告発の内容が別々で不均質であったとしても。というのも、主教らは、我々が公的な場のみならず私的な場においても、典礼を行ったり、誰かを祝福したり、教えたりすることを妨げるよう命じられているからです。これは不敬虔なグリゴリオスには、あるいは「虚栄と偽りの守り手」［ヨナ２、９］たる熱枝派［アルセニオス派］には科されなかった罰です。彼らはカノンに反する不正をなしても、神の裁きを怖れないですし、人々を敬いもしませんが、大胆にもカノンに反する事柄で我々を苦しめるのです[49]。

明らかにアタナシオスは解任され、その司祭資格を停止され、断罪された修道士として暮らすことを余儀なくされていた。ニフォンが免れた裁きをアタナシオスは免れることができなかった。アタナシオスを裁き、彼に有罪判決を下したのは誰か。いうまでもなくそれは教会会議に参集した主教らであるが、彼らの背後にはアタナシオスの失脚を待望する皇帝とアルセニオス派がいた[50]。それでは彼はいかなる告発を受けて裁かれたのか。ニフォンへの告発文にアタナシオスのことも記したフムノスによれば、テオファニスという名の側近のシモニア行為を黙認したのが彼の容疑であった[51]。ところがアタナシオスが皇帝に宛てた1書簡（65番）には、このテオファニスと思しき人物を含む、賄賂を受けた人々への厳正な法的対処を求める記述が含まれている[52]。ニフォンの場合と同じく、アタナシオスには明らかにされることのない何らかの理由によって、裁きは延期されていたのである。

【付記】

本稿の掲載に際して好意的に対応してくださった方々、とりわけ文学学術院の森原隆教授と益田朋幸教授、そして総合研究機構の松澤洋志氏と安藤澄江氏に心より感謝申し上げます。

(Endnotes)

1) Nikephoros Gregoras, *Byzantinae Historiae*, ed. I. Bekker and L. Schopen, vol.1 (CSHB; Bonn, 1829)（以下、Gregoras と略）, VII, pp. 261-2.

2) アルセニオス派のシスマに関する基本文献は、I. Sykoutris, 'Περὶ τὸ σχίσμα τῶν Ἀρσενιατῶν', *Ἑλληνικά* 2 (1929), 267-332; V. Laurent, 'Les grandes crises religieuses à Byzance : La fin du schisme arsénite', *Academie Roumaine. Bulletin de la section historique* 26 (1945), 252-84; P. Gounarides, *Τὸ κίνεμα τῶν Ἀρσενιατῶν (1261-1310)* (Athens, 1991) など。

3) 小アジア地域におけるアルセニオス派の活動については、R.E. Sinkewicz, 'A critical edition of the anti-Arsenite discourse of Theoleptos of Philadelphia', *Mediaeval Studies* 50 (1988), 46-95; idem, 'Church and society in Asia Minor in the late thirteenth century: The case of Theoleptos of Philadelphia', in: M. Gervers and R.J. Bikhazi eds., *Conversion and Continuity: Indigenous Christian communities in Islamic lands, eighth to eighteenth centuries* (Toronto, 1990), 355-64 を参照せよ。

4) Georgios Pachymeres, *Relations historiques: edition, introduction et notes*, by A. Failler; *Traduction française,* by V. Laurent, vols. 1 and 2 (Paris, 1984); *Edition, traduction française et notes*, by A. Failler, vols. 3 and 4 (Paris, 1999)（以下、Pachymeres と略）. 1302 年末の交渉は、Pachymeres, X, 33.

5) V. Laurent, 'Les grandes crises', Annexe I (pp. 285-7).

6) Ibid., Annexe I (p. 287): τέταρτον ὡς ἀνεκβληθῆ τῆς Ἐκκλησίας τοῦ Θεοῦ τὸ τοῦ κῦρ Ἰωσὴφ μνημόσυνον ὡς ἀφορισμομένου καὶ μοιχοῦ.

7) 詳しくは、H.-V. Beyer, 'Eine chronologie der Lebensgeschichte des Nikephoros Gregoras', *Jahrbuch der Österreichischen*

Byzantinistik 27 (1978), 127-55, at 138 および拙稿「キジコス府主教ニフォンの足跡――アタナシオス時代の修道士主教と地域社会」『歴史研究』45 号（2008 年）、38 頁、註 32 を参照。

8) V. Laurent, 'Les grandes crises', Annexe II (プロスタグマ：285-7); III (信仰表明のプロスタグマ：292-5); IV (金印勅書：295-302); V (総主教の赦免文：302-4); VI (総主教の回覧文：305-311); VII (府主教らへの金印勅書：311-3).

9) Ibid., Annexe II (p. 290), ll. 26-7: Ἵνα παυθῇ τὸ μνημόσυνον τοῦ πατριαρχεύσαντος κῦρ Ἰωσὴφ ἀπὸ τῆς συναριθμήσεως τῶν πατριαρχῶν.

10) Ibid., Annexe II (p. 290), ll. 45-7: Ἵνα μηδὲ αὐτοὶ οἱ πρὸ ὀλίγου πατριαρχεύσαντες, ὅ τε κῦρ Ἀθανάσιος καὶ ὁ κῦρ Ἰωάννης, ἀναχθῶσί ποτε εἰς το εξῆς εἰς τὴν πατριαρχικὴν αὖθις περιωπήν.

11) これはアタナシオスに関する研究においても同様である。唯一ともいえる例外は、アタナシオス書簡の校訂者タルボットによる関係書簡への註釈である。A.-M. M. Talbot, *The Correspondence of Athanasius I Patriarch of Constantinople: Letters to the emperor Andronicus II, members of the imperial family, and officials* (Washington, D.C., 1975)（以下、Talbot, *The Correspondence* と略）.

12) アタナシオスの前半生については、拙稿「ビザンツの隠修士とリヨン教会合同」『西洋史学』206 号（2002 年）、24-46 頁;「総主教アタナシオスの遍歴時代――13 世紀ビザンツにおける修道士と聖山」『オリエント』49 巻 2 号（2006 年）、147-64 頁;「コンスタンティノープルの奇跡――総主教アタナシオスに注目して」『アジア遊学』115 号（2008 年）、66-75 頁を参照。

13) ニフォンについては、拙稿「キジコス府主教ニフォンの足跡」、1-47 頁を参照。

14) Cf. A. Failler, 'La promotion du clerc et du moine à l' épiscopat et au patriarcat', *REB* 59 (2001), 125-46.

15) Pachymeres, XI, 11: ἀνδρὸς δραστηρίου καὶ γνώσεως ἐπηβόλου καὶ οὐ μᾶλλον πνευματικοῖς ἢ κοσμικοῖς τρίβωνος πράγμασι.

16) アタナシオス 2 世について詳しくは、A. Failler, 'Le séjour d'Athanase II d'Alexandrie à Constantinople', *REB* 35 (1977), 43-71 を参照。

17) Gregoras, IX, pp. 427-8.

18) Cf. I. Ševčenko, 'Metochites and the intellectual trends of his time', in: P. A. Underwood ed., *The Kariye Djami,* vol. 4: *Studies in the art of the Kariye Djami and its intellectual background* (London, 1975), 19-91.

19) 拙稿「キジコス府主教ニフォンの足跡」。

20) アタナシオスと主教団の関係については、A.-M.M. Talbot, 'The Patriarch Athanasius (1289-93; 1303-09) and the Church', *DOP* 27 (1973), 7-33; J.L. Boojamra, *Church Reform in the Late Byzantine Empire: A study for the Patriarchate of Athanasios of Constantinople* (Thessaloniki, 1982), 91-128; 拙稿『コンスタンティノープル総主教アタナシオスと末期ビザンツ帝国の危機』（課程博士論文、京都大学、2006 年度）、105-50 頁を参照。

21) Cf. Talbot, *The Correspondence*, no. 61.

22) アタナシオスの書簡写本については、拙稿「コンスタンティノープルを遠く離れて――総主教アタナシオスの初期の書簡写本と近年の研究を概観する」『地中海研究所紀要』6 号（2008 年）、109-124 頁を参照。

23) Talbot, *The Correspondence*, no. 89, ad apparatum 1: γράμμα πρὸς τὸν αὐτοκράτορα περὶ τοῦ κυροῦ Νίφωνος ὄντος Κυζίκου διὰ τὰς κατηγορίας τὰς ἀκουσθέντας περὶ αὐτοῦ.

24) Talbot, *The Correspondence*, no. 95, ad apparatum 1: γράμμα πρὸς τὸν αὐτοκράτορα διὰ τὰ λαληθέντα παρὰ τοῦ μοναχοῦ διὰ τὸν Κυζίκου μὴ παραδράμωσιν ἀνεξέταστα.

25) Talbot, *The Correspondence*, no. 105, ad apparatum 1: γράμμα πρός τινας τῶν ἀρχιερέων ὅπως γνωριοῦσι τῷ βασιλεῖ ὅτι ὁ πατριάρχης βεβαρυμένως ἐστὶ διὰ τὸν Κυζίκου.

26) Talbot, *The Correspondence*, xxxvii.

27) E. Patedakis, *Athanasios I Patriarch of Constantinople (*1289-1293, 1303-1309*): A critical edition with introduction and commentary of selected unpublished works* (D.Phil.Thesis, The University of Oxford, 2004), 164-5.

28) Talbot, *The Correspondence*, no. 89, ll. 28-9: ἀναχωρῆσαι γὰρ ἄλλως ἐν τῇ λαχούσῃ κἀκείνῳ ἀσύμφορον καὶ ἡμῖν.

29) たとえば、Talbot, *The Correspondence*, no. 14, ll. 19-20: καὶ τῇ λαχούσῃ ἀρχιερέων ἑκάστῳ καλῶς ἠναγκάζετο διατρίβειν.

30) Talbot, *The Correspondence*, no. 95, ll. 34-6: ὅτι τῶν σωτηρίας ἐφιεμένων, οὐ μόνον τὸ κοινωνεῖν, ἀλλ' οὐδὲ τὸ φιλιάζειν, τοῖς κατὰ τῶν ἁγίων εἰκόνων λυττῶσιν, ἀνέξεταί τις.

31) Nikephoros Choumnos, Ἔλεγχος κατὰ τοῦ κακῶς τὰ πάντα πατριαρχεύσαντος Νίφωνος, ed. J.F. Boissonade, in: idem, *Anecdota Graeca*, vol. 5 (Paris, 1833), 255-83. グリゴラスもニフォンが教会会議で告発を受け、それによって総主教位を退いたと記している。Gregoras, VII, pp. 269-70.

32) Choumnos, Ἔλεγχος, 271: κατ' εἰκόνος Χριστοῦ καὶ τῆς μητρὸς αὐτοῦ καὶ τῶν σεπτῶν ὁμοίως εἰκόνων λυσσῶντα...

33) Talbot, *The Correspondence*, no. 95, l. 40: λύπης, ὡς οἶδε Θεός, τὴν ψυχήν σου συμπληρωσάσης κἀν τούτῳ.

34) Gregoras, VII, p. 259: τῷ βασιλικῷ θελήματι τῶν ἀρχιερέων εἰξάντων καὶ μεταστησάντων αὐτὸν ἐκ Κυζίκου πρὸς τὴν τῆς πατριαρχείας περιωπήν.

35) Talbot, *The Correspondence*, no. 89, ll. 2-5: Ἡνίκα τινὰ τῶν

ἐν δίκαις συνεχομένων παρὰ μεγάλων συμβῇ πρὸς ἡμᾶς σταλῆναι προσώπων ἀκουσθῆναι τὴν δίκην ἐκείνων συνοδικῶς ἀξιούντων, οὐ πρὸς ἀναβολὰς χωροῦμεν καὶ ὑπερθέσεις τῶν πεμψάντων χάριν, ταχέως ἐπιμελούμενοι καὶ ὡς δέον φροντίζοντες.

36) Cf. J. Hajjar, *Le Synod permanent dans l'Eglise byzantine des origines au XIe siècle* (Rome, 1962).

37) アタナシオスは2度目の在位期に、従来の常設教会会議の代わりに、年次教会会議と修道院長会議を設置した可能性がある。仮にアタナシオスがニフォンへの裁きを後者の会議において行おうと考えていた場合、投票により裁きを下す主体は総主教であるアタナシオスと修道院長らであった。上の註20の諸文献を参照。

38) Talbot, *The Correspondence*, no. 89, ll. 13-28: διὰ τοῦτο τὰ φθάσαντα ἡμετέραις πεσεῖν ἀκοαῖς μὴ ὥς τι τῶν εὐκαταφρονήτων ἐάσωμεν ἀνενέργητα, μηδὲ καιροῦ ὑπερθέσει, ὅπως ἐπιλησθῶμεν, ἢ ἐξ ἄλλων φροντίδων.....ἔνθεν ὡς ἂν καὶ φροντίδος καὶ ἁμαρτίας ἐκλυτρωθῶμεν (τῶν γὰρ λίαν βαρέων τὰ ἀκουσθέντα), ἅπερ καὶ πρώην ἀνέφερον, ζητῶ καὶ τὰ νῦν· τηρηθῆναι τῶν δύο τὸ ἕν, ἢ τηρηθῆναι παρὰ τῆς ἐκ Θεοῦ βασιλείας σου, τῶν ἀμφοτέρων συνοψισθέντων, τοῦ κατηγόρου καὶ καθ' οὗ ἡ κατηγορία, ἢ ἐμπιστεύσασθαι τοῦτο ἡμῖν ὀλίγων τινῶν παρουσίᾳ, κατακοῦσαι τῶν ἀμφοτέρων.

39) 1290年代半ばにアンドロニコス2世は司法改革として、聖俗の少数の裁判官からなる法廷を設置しようと試みたが、この新たな法廷は定着しなかった。Pachymeres, IX, 16.cf. P. Lemerle, 'Le juge général des Grecs et la réforme judiciaire d'Andronic III', in : *Mémorial Louis Petit* (Paris, 1948), 292-316, at 294.

40) Talbot, *The Correspondence*, no. 95, ll. 28-34: ἔνθεν ἀντιβολῶ, μὴ ὡς ἔτυχε καὶ τὰ πρὸς τοῦ μοναχοῦ λαληθέντα, πολλὴν ἀπειλοῦντα τὴν βλάβην, παραδράμοιμεν ἀνεξέταστα, μήδε βραδύνῃ. εἰ γὰρ αὐτὸν καταλήψεται θάνατος ἢ τυχὸν καὶ μεταναστεύσει, πολὺν δισταγμὸν συνειδήσεσιν ἐμβαλεῖ τῶν ἀκριβαζομένων, ἀλλὰ δὴ καὶ τῶν Ξυλωτῶν καὶ τῶν ἄλλως ὀρεγομένων ζητεῖν ἀφορμάς, εἰ μὴ τὴν ἐξέτασιν ἀκριβασαμένων ἐλευθερίως καὶ φιλαλήθως ἡμῶν ἡ ἀδικία ἐμφράξει τὸ στόμα αὐτῆς.

本文引用で「熱枝派」と訳した語はΞυλωταί である。これはアルセニオス派の自称である熱心派Ζηλωταί と、木を意味する ξύλον もしくは引き裂くことを意味する動詞 ξηλώνω を組み合わせた思しきアタナシオスの造語。Talbot, *The Correspondence*, no. 19, commentary (p. 326) を参照。

41) Talbot, *The Correspondence*, no. 105, ll. 2-9: Τὸ οἰκονομεῖν τοὺς λόγους ἐν κρίσει τῆς τελειότητος ἴδιον· ἡμεῖς δὲ οὐ μόνον μὴ πεφθακότες τὸ τέλειον, ἀλλὰ καὶ τῶν ἀτελῶν ἀτελέστερον διακείμενοι, ἵνα μὴ τῶν οἰκονομούντων καταγινώσκωμεν, ἢ οἰκονομεῖν γνωματευόντων, πάλιν ἡμῶν θεῖναι τὸ στόμα φυλακὴν βεβουλήμεθα, ἕως ἂν τοῖς οἰκονομοῦσι δοκεῖ – οἰκονομεῖν γὰρ αὐτοὺς τὰ ἡμῖν μὴ ἀρέσκοντα, εἴτε ἐξ ἀτελείας ἡμῶν, εἴτε καὶ ἄλλως πῶς, ἀσθενοῦμεν ἀκολουθεῖν – ἄλλως τε ἵνα μὴ καί τινας τῶν ἐνταῦθα οἰκούντων παραλυπήσωμεν.

42) つまり動詞オイコノメオーは、オイコノミアを行うことを意味する。オイコノミアはビザンティンの教会法および神学上の重要概念である。A.P. Kazhdan et als. (eds.), *The Oxford Dictionary of Byzantium* (Oxford, 1991), s.v. 'Oikonomia' (A. Papadakis); G. Dagron. 'La règle et l'exception: Analyse de la notion d'economie', in: D. Simon (ed.), *Religiöse Devianz : Untersuchungen zu sozialen, rechtlichen und theologischen Reaktionen auf religiöse Abweichung im westlichen und östlichen Mittelalter* (Frankfurt-am-Main, 1990), 1-18 を参照。

43) Talbot, *The Correspondence*, no. 105, ll. 13-7: εἰ οὖν μηδὲ λειτουργεῖν ἡμᾶς ἀνέχονται ἄλλοι, εἰ μὴ καὶ τῷ Ῥώμης δόξῃ καὶ ὡς ἐκείνῳ δοκεῖ, δέον ἡμᾶς λογιζόμεθα καθέζεσθαι οἴκοι τοῦ φροντίζειν τὰ ἑαυτῶν. εἰ γὰρ ἀπέλθωμεν ἐν τῇ ἐκκλησίᾳ, τοῖς πυθομένοις τί το τῆς ἀλειτουργησίας οὐκ ἔχομέν τι ἀποκρίνασθαι.

44) Gregoras, VII, pp. 259-61.

45) いずれもコンスタンティノープル市内にあった女子修道院である。両修道院については、R. Janin, *La géographie ecclésiastique de l'empire byzantin,* p. 1, *Le siege de Constantinople et le Patriarcat oecuménique,* t. 3: *Les églises et monastères*, 2nd ed. (Paris, 1969), 396-7 (Pertze), and 510-1 (Krataiou) ; V. Kidonopoulos, *Bauten in Konstantinopel* 1204-1328 (Wiesbaden, 1994), 1.1.13 (Krataiou: pp. 36-7) and 1.1.28 (Pertze: pp. 61-2)、クラテウの創始者、アンナ・コムニニ・パレオロギナ・ストラティゴプリナについては、A.-M. Talbot, 'Building activity in Constantinople under Andronikos II: The role of women patrons in the construction and restoration of monasteries', in: N. Necipoğlu ed., *Byzantine Constantinople: Monuments, Topography and Everyday Life* (Leiden, 2001), 329-343, at 332 を参照。

46) 自身もこの恩恵の受け手であったアタナシオスは、皇帝宛ての書簡でこの慣行を批判している。Talbot, *The Correspondence*, no. 69.

47) Gregoras, VII, p. 260.

48) Talbot, *The Correspondence*, xxv.

49) Talbot, *The Correspondence*, no. 115, 121-8: αὕτη ἐπὶ Θεῷ μάρτυρι τῆς παραιτήσεως τῆς πρώτης καὶ τῆς δευτέρας ἡ συσκευὴ καὶ ὑπόθεσις, εἰ καὶ τὰ τῶν κατηγοριῶν ποικίλα καὶ ἄνισα, ἐπεὶ δὲ οὐ δημοσίᾳ καὶ μόνον, ἀλλὰ καὶ οἴκοι, τοῦ ἱεᾶσθαι καὶ εὐ – λογεῖν καὶ διδάσκειν τοῖς τυχοῦσιν ἀπείργειν ἡμᾶς οἱ ἀρχιερεῖς ἐγκελεύονται (ἅπερ οὐδὲ τῷ δυσσεβεῖ Γεωργίῳ, ἢ τοῖς φυλασσομένοις τὰ μάταια καὶ ψευδῆ

Ξυλωταῖς ποσῶς ἐπετίμησαν), μὴ ἑαυτοὺς ἀκανόνιστα πράττειν καὶ ἄθεσμα τὴν κρίσιν φρίττοντες τοῦ Θεοῦ, ἢ κἂν ἀνθρώπους αἰδούμενοι, ἀλλ᾽ ἡμῖν ἐπιτρίβειν θαρροῦσι τὸ ἀκανόνιστο.

この書簡は、匿名の請願担当長官（エピ・トン・デイセオン）に宛てられたものである。つまり、アタナシオスはこの書簡により、正当な裁判の実施と名誉回復を「請願」している。最初の辞任後とはことなり、２度目の辞任後、彼が重い教会罰を受けていたことは明らかである。文面は、彼が告発から自らを弁護する場を持たなかったことを示唆する。この書簡およびアタナシオスの最晩年については、拙稿「総主教アタナシオスとヴァティカン写本の筆跡――マノリス・パテダキスの新説を吟味する」『オリエント』51巻２号（近刊）を参照。

なお、本文の引用で「退位」と訳した名詞παραιτήσις は、もともとは嘆願、口実、赦免をおもに意味する語であったが、近代にかけて、辞任や退位をもっぱら意味するようになった。H.-G. Liddell and R. Scott, *A Greek-English Lexicon*, rev. and augm. Sir H.S. Jones (Oxford, 1996); E.A. Sophocles, *Greek Lexicon of the Roman and Byzantine Periods* (Cambridge, 1914); W. Crighton, *Μέγα Ελληνο-Αγγλικόν Λεξικόν* (Athens, 1960) を参照。

50) 皇帝が 1310 年のシスマ終結後に発行した金印勅書は、シスマの終結を歓迎し、その保証を求める６名の府主教がいたことを明らかにする。V. Laurent, 'Les grandes crises', Annexe VII.

51) Choumnos, Ἔλεγχος, 259-60; Talbot, *The Correspondence*, no. 65, commentary (p. 376).

52) Talbot, *The Correspondence*, no. 65, ll. 9-11: ἀλλ᾽ ἀξίως ἐπιτιμάσθω ἐπάρατος πᾶς, εἴτε Θεοφάνης, εἴτε οἷός ἐστιν ὁ χρώμενος τῇ αἰσχροκερδείᾳ καὶ τῇ διαβολῇ, καὶ κατὰ τῆς ἀληθείας χωρῶν, καὶ ταύτης καταψευδόμενος.

タルボットも２人のテオファニスの同一を推測している。